

＜書評＞

嶺崎寛子著

『イスラーム復興とジェンダー——現代エジプト社会を 生きる女性たち』

(昭和堂 2015年 336頁 ISBN: 978-4812214343 6,000円+税)

鳥山 純子



本書は、「イスラームとジェンダー」(p. 27)を専門とする著者が、2000年代のエジプトを舞台に、当事者にとって「主体的に女性のムスリムであること」(p. 5)の意味やその具体的なありようを、女性説教師の勉強会や日常的な問題解決に用いられるファトワー（信徒の質問に答えてウラマーによって出されるイスラーム法に関する法的見解）の考察を通じてイスラーム言説との関わりから明らかにする著作である。その目的は、欧米や日本に広く見られるイスラームに関わる「ジェンダー・オリエンタリズム」(家父長制に基づく女性抑圧的なものとしてイスラームを非難する見解)に抗いつつ、女性のムスリムについての理解を探究することであるという。本稿では、ジェンダー人類学を専門としながら近似の対象（2000年代のエジプト都市部の女性）を研究する筆者の立場から、本書の概要提示と、主要な議論についての批評を行いたい。

第1章「はじめに——ジェンダー・オリエンタリズムの向こうで」で著者は、女性のムスリムに関わる「ジェンダー・オリエンタリズム」が欧米や日本の学界に広く見られることを指摘する。そして、「ジェンダー・オリエンタリズム」から離れた場所で「宗教とジェンダー学と人類学の三者を相互補完的に架橋し」「エジプト女性の日々の宗教実践を分析するための場所と理論を目指す」という本書の目的を提示する (p. 27)。

第2章「日々、イスラーム言説を使う——女性説教師の活動」では、カイロ近郊で女性説教師が開く二つのイスラーム勉強会を事例に、女性によるイスラーム言説の利用に関する分析が示される。そこで明らかになるのが、多くの女性のムスリムが進んでイスラームの知識を得ようとしていたこと、彼女たちがその知識を家庭生活における交渉の資源に用いていたことである。

第3章「多元的法秩序としてのシャリーアとファトワー」では、イスラーム言説の一つとしてファトワーを取り上げ、その法的位置づけの分析から、現代エジプトのムスリムが国家法、シャリーア、慣習という多元的法秩序を生きていることが示される。またシャリーアが女性の日常に直接関わる「私的領域を包括する法」(p. 277)であること、ファトワーが複数の法のせめぎあいの中での「裁定規範」(p. 130)として重要な意味を持つことが示される。

第4章「日々、ファトワーを使う——生活の中のイスラーム言説」では、電話によるファトワーの提供サービス、「イスラーム電話」を事例に、利用者による望ましいファトワーを得るための試み（ファトワー・ショッピング）の背景に、①利用者、ウラマー、クオリティコントロール・スタッフの間の交渉と、②ウラマーによるシャリーアと社会規範の摺合せという二つの交渉が描かれる。著者はこれを神のお墨付きのもとに行われる「規範の再定置」(p. 196)と捉え、そこにジェンダーの状況改変の契機があると指摘する。さらにファトワーには、女性にとって「使い勝手のよい」交渉資源かつ抑圧装置と

いう両義的な働きがありながらも、宗教に高い優先順位が与えられる状況において、女性にとっては自己承認や自己肯定の重要なツールとなっていることが示される。

第5章「ファトワーに見るジェンダー意識と法文化——婚姻と姦通を中心に」では、婚姻と姦通にまつわる公刊されたファトワーをもとに、ファトワーに見るジェンダー意識と、シャリーアが持つジェンダー構造が示される。著者はそこから、現代社会を生きる人々が、名誉や評判を守るために「いかに振る舞うべきか」のガイドラインをファトワーに求めていたと結論づける。

第6章「結び 差異は恵みである——イスラームと生きるということ」では、第1章から第5章の議論に基づき、女性たちの宗教実践から見た①合法性、正統性、権力と権威、②公正と祈りの意味付け、③ファトワーによる法の攪乱、転覆、脱構築の可能性、という三つの論点が総括される。そこで著者は、女性による積極的なイスラーム言説の利用には「敬虔であることの利益」(p. 278)が大きく関わっていること、彼女たちの公正という概念は普遍的人権論とは異なる論理構造に根差していること (pp. 280-282)、そしてファトワーとは質問と回答という無数の「法の反復行為」(pp. 285-287)であり、法の多様なヴァリエーションを無限に生みだし、ジェンダーに関わる「攪乱」をもたらしうるものと議論する。

イスラームとジェンダーに関わる著作としての本書の意義は、第一に、女性たちによる積極的なイスラームへの関与を明らかにすることにより、イスラームは女性抑圧的だとするジェンダー・ステレオタイプを覆したことにある。本書で提示される宗教実践の議論では、イスラームと女性に関わる「誤解」の払拭だけでなく、女性のムスリムとしての宗教実践がイスラームの論理体系の中で丁寧に跡づけられている。例えば第6章3節では、「公正」、「敬虔」、「平等」の概念を取り上げ、それらの語彙の日常的な文脈における用法の提示とシャリーアの論理に基づく解説から、普遍的人権論との相違が詳細に提示されている。これにより読者は、そうした概念の女性のムスリムによる意味付けを理解できるだけでなく、普遍的人権論に対する批判的論点を読み取る眼差しも獲得することができる。

第二の意義は、イスラームの知識伝達の現場を描き出すことにより、イスラームの実践が持つダイナミズムが説得的に提示されることにある。とりわけ、第4章における「イスラーム電話」での応答の記述は出色である。本書では、著者が採取した1319件という膨大な事例のほんの一部が提示されるにすぎないが、それでも読者は、いくつもの事例を読み進めることによって、「イスラーム電話」に関わる利用者、ウラマー、スタッフが、望ましいファトワーを求め相互に、また社会的規範に対し行う交渉過程を目の当たりにすることができる。具体的な対話の機微が描き出された記述は、本書の議論の射程のみならず、イスラーム学、法学、文化人類学における議論にも幅広く資する資料であろう。このように本書は、イスラームが他者化の指標とされる近年の社会状況において、イスラームの内実を丁寧に描き出すことから社会的偏見に挑戦する優れた著作である。

こうした重要性を踏まえた上で最後に、ジェンダー視点を用いた文化人類学的研究としての本書の課題について二つ記しておきたい。まず一つ目の課題が、「女性たち」に関わる民族誌としての、各論と総論における議論のブレ・混同である。各論では、女性説教師、勉強会への参加者、イスラーム電話の利用者という「女性たち」にとっての宗教実践が持つ意義や意味合いが分析されている。ところが第6章2節で示される「合法性、正統性、権力と権威」についての総論では、イスラーム言説をめぐる「女性たち」の宗教実践の在り方や意味づけが、各論の知見から離れて、シャリーアという法システムの構造に関わる議論にシフトを見せる。さらにその際、それまで個々に議論されてきた三つの集団が、イス

ラーム言説を一つの拠り所に生きる「女性たち」として一括りに語られる。もしこの分析がその名の通り「イスラーム言説をめぐる女性たちの宗教実践」(p. 270)の民族誌としての総論であれば、そこで期待されるのは、各論から導き出された、「イスラーム復興とジェンダー」の意味付けとその分析であろう。総論で代わりに提示されるシャリーア論や権威・権力論および一般化された「女性たち」の記述には、各論で丁寧に描かれた「女性たち」の姿が既存の議論にすり替えられたような印象が残り、「女性たち」の具体的な生き方からジェンダーに関わる規範や構造を脱構築、もしくは攪乱するという本書のボトムアップなフェミニスト・アジェンダがむしろ限定されたように読める。

二つ目の課題は、本書の全体を通じて見られるイスラームと女性にまつわるステレオタイプの存在である。ここではなかでも特に重要だと思われる、①女性のセクシュアリティ監理への過度な関心と、②男性を抑圧の主体に語る傾向について指摘しておきたい。この二点をあえて取り上げるのは、そのどちらも、近年蔓延するイスラームに関わる「ジェンダー・オリエンタリズム」の重要な構成要素と考えられるためである。①女性セクシュアリティ監理の重視については、第5章の冒頭で著者により「本章で婚姻と姦通を取り上げて論じるのは、それがシャリーアのジェンダー構造および社会規制の根幹を形成する部分だからである」(p. 232)とする説明がある。しかしながらその根拠として言及されるのは、婚姻の社会的重要性に限られる。婚姻と姦通が、社会におけるそれ以外の事柄に比べていかに重要で、いかに「シャリーアのジェンダー構造および社会規制」の根幹たり得るかは十分に論じられていない。また、②男性を抑圧の主体に語る傾向は、例えば女性によるイスラーム言説の利用の議論に見ることができる。そこで著者は抑圧の主体は家族、親族、古い慣習であるといいつつ、その具体的なありようとして「男性による監理や干渉」(p. 271)や「夫による暴力」という男性による抑圧(pp. 276-277)に言及する(それ以外にも第2章4節の議論などに同様の傾向を見ることができる)。他方、中東ジェンダー研究の文脈で論じられてきた家父長制がもたらす抑圧に関わる女性同士の関係(嫁姑間、嫁嫁間、姉妹間、母娘間関係)については言及がない。

「女性たち」の行為をシャリーアの論理構造から説明しようとすることと性や抑圧主体をめぐるステレオタイプの再生産という二つの課題は、おそらく対象とした現地の言説にあらかじめ埋め込まれていたものと推察される。しかしながら、この二つの特徴は、イスラーム復興のもとに推進された西洋近代的な核家族的男女モデルとイスラームの接合が見せる歪みともとれるものである。それらの批判的検討こそ「イスラーム復興とジェンダー」に関わるさらなる議論の深化と、徹底した「ジェンダー・オリエンタリズム」の解体をもたらす優れた議論となったはずであり、その点が看過されたことには歯がゆさが残る。

これらの課題は見られるものの、女性のムスリムの宗教実践や見解をイスラームの文脈に位置づけ、「ジェンダー・オリエンタリズム」に挑戦した本書は、女性のムスリムを共感のもとに身近な存在として描き出す意欲作であり、イスラームや中東の女性に関心を持つ読者にまず読まれるべき一冊と言えるだろう。

(とりやま・じゅんこ／日本学術振興会特別研究員)